

第35号  
Vol.12-2  
2015年9月1日

# Dari Kuching

## アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人嬉泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Hose Lane, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 Tel.Fax: +60-84-31-0757 E-mail: [info@ace-jps.com](mailto:info@ace-jps.com); [gkerkn@gmail.com](mailto:gkerkn@gmail.com)



「ムヒバ」のリマオが実をつけました〜♪

撮影者 中澤 健

我が家で見られる日本のテレビはNHKワールドプレミアム。子ども向け番組が始まる夕刻は、なるべく家に居たいと思っている。子ども向けと言っても、様々なプログラムがある。どれも見ているだけで、疲れが癒される。着ぐるみも良いし、遊びながらのお勉強も楽しい。時に美しいアニメーションに心を奪われたりする。出演する幼児の大人びた仕草も可愛くて思わず微笑んでしまう。

毎日でも見たいお気に入りには「お母さんといっしょ」。歌のお姉さんの声も美しく、踊りも軽快。お兄さんと一緒に歌う「そよそよの木の上で」の歌とアニメは、何回聴いてもうっとりする。

そして、何よりの魅力が子どもたちだ。3歳前後の元気な保育園児(?)と一緒に飛び跳ねる。なりたての3歳も、間もなく4歳の子もいるだろう。ちょっと早熟気な子、社会性抜群の子もいるし、その反

対の子や一緒に動けない子、一人で飛び回る子もいる。隣の子が気になる子もいれば壁の前から頑固に動かない子もいる。

個性的な子どもたち。お母さんはカメラの側にいるのかなあ。きっと気がもめて居るんだろうな、等と思っていると、はみ出しっ子に歌のお姉さんがさりげなく手を差し伸べたり抱き上げたりする。さりげなく、にこやかな優しさに心が和む。(健)

## ふたつの祖国

Mr. Jared Kubokawa  
(シブ 在住)

1949年祖父の結婚式

この物語は、明治時代の終わり頃、武士階級ではあるものの、その頃の慣習として、農業にも従事していたある家族のアメリカへの移民に始まる。江戸時代末期から明治維新を経て、日本が社会的産業的に成長した後、日露戦争に勝利したとは言え、日本の景気は悪かった。広島府の小さな山村だったので水源もなく、農業は小規模であり、夫婦は新聞広告などから情報を得て、少しでも良い生活のために、長男をアメリカに送ることにした(1904)。アメリカに移住したこの長男が私の曾祖父にあたる人物であり、日系1世である。彼は、渡航から3年後、日本女性(曾祖母)とカナダで結婚式をあげている。見合い結婚であったらしいが、そんな日本の習慣が私には興味深くまた謎でもある。その頃すでに曾祖父は、彼と家族が生活するための基盤を整えていた。1918年には31エーカーの土地を確保、安定的な中産階級になっていた。彼らはカリフォルニア州ロディに定住し、4人の子どもを得た。度々、故郷に送金をした書類も残っている。曾祖母は、結婚後、家計を切り盛りし、助産婦、看護婦、メイドとしても働き、また、アメリカ上流階級の洋食作りを学び、腕の良い料理人として現地で信頼されよく働く婦人であった。1919年、ふたりは一時的な帰国のつもりでカリフォルニア州を後にしたが、日本で父親が亡くなり、彼ら夫婦は、そのまま家を継ぐことになった。渡米時(15年前)、家を離れた時には、2つの水田と小さな家のみを所有していたが、帰国した後、彼らははるかに大きな家を建て、周辺の土地の全てを買い、彼の子どもたちが通う小学校にはピアノを寄贈している。曾祖母はアメリカから持ち帰ったミシンで洋服を縫い、パンやクッキーを焼い

た。当時の田舎では珍しいことだったに違いない。曾祖父たちは、その後、さらに2人の子どもに恵まれた。満州事変(1931)勃発、日本は国際連盟脱退(1933)。そんな状況下、アメリカ国籍を持った4人の子どもたちは、日本の教育を終えた後兄弟姉妹だけで、再び、カリフォルニアに戻っている。その中の一人が、私の祖父である。

1937年彼は21歳になっていた。アメリカで良い生活をするために戻ったはずの兄弟姉妹だが、1941年、日本の真珠湾攻撃で第二次世界大戦に突入したことにより、日系2世である祖父、雅彦は戦中の強制収容、人種差別という困難な道を歩むことになった。祖父には日系2世という事実と大戦後のアメリカ人という2つの歴史的側面があった。この時代の私たち家族の大きな皮肉と悲劇は、父方の大祖父は日本のために中国で戦い、母方の大祖父は、アメリカのためにタラワ(日本との激戦地)で戦っていたということである。

祖父は1942年にカリフォルニア州の強制収容所に抑留された。日本語を完璧に話せることからスパイと疑われたこともあるが、それまでに知り合っていた米国の知人の数人が彼のために早期釈放を嘆願した。手紙のいくつかは、日系人戦争博物館に現存。その内容は彼の働きぶりや清潔さを証明。アメリカへの忠誠のチャンスを与えられるべきだと書かれていた。結果的に彼は、無期限の長期休暇という名目で釈放された。この強制収容所では17歳以上の日系人で日本の天皇に忠誠を誓う疑いのある者の多くは、連邦刑務所行きとなったり、アメリカの市民権を剥奪された。強制収容所からアメリカ兵として不屈の精神で戦った日系人の442部隊は、その後自由と市民権を剥奪されることはなかった。

広島と長崎に投下された原爆は多くの死傷者を出し、日本に大きな苦しみをもたらした。私たちの家族は市内から北西20kmの地点にもかかわらず無事。3日後、大祖母は廃墟の街に米を届けたという。

祖父は、抑留解放後、紆余曲折を経て、ミシガンの湖畔にあるレストランで働き、出会ったアメリカ女性、ローズマリーと愛を育んだ。さまざまな問題を乗り越え、4年後、1949年に雅彦はローズマリーと結婚した。2人は6人の子どもに恵まれたが、その内の1人が私の父、日系3世(1992没)である。

曾祖父が移民をし財産を築き上げた英雄であるならば、祖父は、戦争、抑留、人種差別等乗り越え、愛を得て生き延びた歴史の主人公だと私は思う。

私が日本の家族に接触しようと思ったのは、私自身のルーツを見つけるためであった。米国を出る前、日系人戦争博物館で祖父の抑留記録を見つけると共にこの問題について研究を行った。これらの情報は、私の家族全体の歴史を解明する欲求を満たしてくれた。

日本では、仕事の傍ら努力し、日本の家族と初めて出会い、時間の経過と共に自分自身を発見することができた。また、曾祖父から2代を遡り、江戸時代から続く家族史を手に入れることができた。私の日本の家は、三葉葵(徳川家と同じ)の紋章をもつ家系であることを知り、関連のあるなしは別に「葵」という文字から古典(源氏物語、葵の上)など日本文学にも関心を持ち得たことを幸せに思っている。(翻訳/要約:中澤和代)

## 一学生が見たマレーシアの“今”

古藤あずさ (7月までクチン在住)

みなさんこんにちは。現在サラワク州にあるサラワク大学 (University Malaysia Sarawak, 通称NIMAS) で1年間の交換留学をしている古藤あずさと言います。日本の北九州市立大学というところから来ており、サラワク大学では国際関係を学んでいます。マレーシアには2014年の9月から後期試験が終了する今年の7月中旬まで滞在する予定です。普段は学内の寮で現地の生徒と共同生活をしながら授業に通い、課題に追われる日々を送っています。小さい大学から来ていることもあり、学校の広大な敷地 (敷地内には大きな湖や村まであります) に驚いたり、学内では毎時のアザン (イスラム教徒に礼拝の時刻を知らせる歌のようなもので、モスクのスピーカーから大音量で流れてきます)、豚肉・アルコールなど一切のハラーム食品 (イスラム教で口にしていけないとされているもの) が学内では禁止となっており、豚肉が滅多に食べられないといった今まで経験したことのない環境で生活したりと授業以外にも多くのことを学んでいます。小さいことかもしれませんが、その中からやはり一緒に生活してみないと知らなかったであろうマレーシアと日本の文化の違いについて、学生目線から考えたことをいくつかご紹介したいと思います。

まず初めにこちらに来て驚いたのは「マンディ」、つまりシャワーの頻度と重要性です。みなさんシャワーは一日に何回しますか？私は今まで一日1回、夏の暑い時などは2回することもありますが、基本は一日の終わりに1回で生活してきました。ところがこちらに来てからはみんないつでも「マンディした？」と聞きます。特に朝、始めの頃は、「なぜだろう？」と思いつつ「昨日の夜にしたから今朝はしてないよ」と答えま

す。すると友達に驚き、次に笑いながら「みんなー！ソフィ (私のあだ名) はマンディしてないってー！」と周りに言いふらします。何がそんなに面白いのかと思ったら、こちらの人は、一日のうちに朝、学校帰り、寝る前、汗をかいたらいつでも、と何回もシャワーをするんですね。朝と夜は当たり前、一日2回は最低限のようで、日本の1日1回説は全く受け入れられません。驚くのは、朝どんなに寒くてもシャワーをすることです。サバのケニンガウという山の中にある、友人の家を訪れた際、まるで秋の夜のような肌寒さの中でもみんな震えながら冷水でシャワーをしていました。なんでそこまで…？と思うのですが、最近になり、その文化が私にも染み付いてきたようで朝シャワーをしないとなんとなく落ち着かない気持ちになるようになりました。



サラワク大学の友人たちと共に

次に驚いたのは、家族の絆がとても強いこと。兄弟姉妹はとても仲が良く、親を敬い愛するものだという考えが染み付いています。年に一度家族写真を撮ったり、またそれを家の壁に飾ったり。両親の写真や家族写真を携帯に何枚も保存していたり、財布の中に入れておいている人もいます。常に「家族が

恋しい〜」「あぁ〜、実家に帰りたい〜」と家族を恋しがっています。そして試験が始まる時期になると、みんな頭の中は勉強のことと帰省の飛行機のチケットのことでいっぱいです。試験が終わった途端、みんなあつという間に実家へ帰っていきます。日本のように思春期で、親のことを煩わしく思っているとか思っていた様子もなく、その家族愛に満ちた言動には度々驚かされます。例えば同年代の男の子が「自分はお母さんに毎晩電話している」と言ったり、男子も女子も親の誕生日にFacebookやInstagramなどのSNSに写真付きで「He (Father)/She (Mother) is my King/Princess」と投稿をしているのを目にします。自分や自分の兄弟など、日本で見てきた思春期と比べるとそれは「ファザコン・マザコン」とも言えるようで、でもマレーシアではむしろ親は当たり前前に恋しく思う対象で、考え方のギャップにとっても戸惑います。親とは月に数回メールで近況報告するだけ、電話はこちらに来て一度もしていないという、それもまた周りにはとても驚かれます。自分は「親離れしている」程度の認識だったのですが、周りのみんなの家族との距離の近さを見ると、家族のことが気になってきたりもします。

日本にいた時はほとんど生活の中で気にすることのなかったマレーシア。ですが、縁あって1年間ここで生活することができています。多民族国家の面白さ、日本ではなかなか知る機会も少なく、イメージが固まってしまうがちなイスラム教の本当の姿。そして何より、発展に伴い変化する文化の今の姿。人々の暮らし、考え方、価値観。残り2ヶ月ほどですが、まだまだ多くのことを吸収して、少しでも日本で伝えることができたいなと思っています。

## こんなところにアメリカ人?

中澤 和代

ある日、連絡事項がありロングハウスのトゥアイルマ(家長)の家に行くと先客があり、いつものように客人と握手を交わした。最初に「ワタシは英語のセンセイデス」と…。うんっ? えっ? 日本語? 「ワタシはアメリカ人デス」。どうしてこんなところにアメリカ人? と思う私。何しろ、ついこの間まで電気もなかった周りジャングルしかない村である。しかし、「こんなところに日本人?」と思われてるかも知れない私が彼に向かって「こんなところにアメリカ人?」と感じる不思議。こうして始まったMr. Jaredとのやりとり。私は、たちまち、日米間歴史に取り憑かれ、今号へと続いた…。

Mr. Jaredは、日系4世。ほぼ世界中にある「ブリテッシュカウンスル」という英語教育の団体に属し2007年~2011年の間に計3年間、日本のそれも四国(筆者の故郷)の小中学校で子どもたちの英語教育に携わり、その後、イタリアへ。現在、マレーシア、パワン近郊の5つの小学校で教師たちの英語教育アドバイザーをしている。日系と聞いた途端、どの時代に誰が? どういう関わりで? と私の疑問も続く。そうするうち彼の方も私に頼みたいことがあると…。ここまで多分、20分ほどの時間だったと思う。彼の頼みたいこととは、近々、アメリカの彼の叔母(日系3世)とその息子(日系4世)が日本の家族(広島)を訪ねたいが、それを電話で伝えるためのサポートをしてほしいというのだった。日本語が少々はわかるが、用件を相手に正確に伝えるには日本語力不足とのこと。私はすぐOKした。

彼は日本滞在中に自分のルーツを確かめるために歴史を遡り、日本の家族を訪問し、すでにA-70頁にあまる英文のノンフィクション物語を書いていた。我が家に来た時に質問の多い私のためにパソコンにコピペしてくれた。読み進むうちに「日米の歴史に翻弄された4世代の家族」をさらに知りたく、翻訳ソフトを駆使しながら、

移民・戦争・抑留等々の過酷な事実に驚き、全頁を読破。3日後、70頁の英語版をA4-5頁の短縮日本語版にまとめた。江戸時代に始まる始祖(1805)、そして次代~曾祖父の移民(1904)~祖父日系2世~父3世~本人4世の6代にわたる家系図もできた。アメリカの家族が広島訪問をするにあたりそれらを日本の家族宛の手紙に添えてほしいというJaredの希望により私はこれを同封した。何度かJaredと我が家で電話サポートを行い、アメリカの家族は8月はじめに無事先祖(4世代前)までタイムトンネルを遡り良い時間を過ごしたようである。

私はDari Kuchingに今回、掲載することを了解してもらった。一つは彼自身の手記を。一つはこの記事である。残された紙面に日本およびマレーシアについて、私のインタビューに彼がどう答えたかを書くことにする。( )内は私。

①人々: 日本人は素晴らしいが、シャイな人が多い(多分、恥ずかしがって話さない?)。マレーシア人はフレンドリー。

②環境: 地震、日本の福島津波など、直接ではないが、印象深い。今、マレーシアでは暑さと湿度の多さが気になる。

③経済: 日本の都会は何でも高く暮らしていくが田舎なら大丈夫(彼は香川県に住んでいた)。マレーシアの物価はまあまあで、暮らしやすい。

④英語教育: 日本人は、教育全般の水準は高いが、英語だけに限ると、勉強をしているので、書くことはできるが、話すことは苦手。小学校で子どもたちに教えるのが好き。何故なら、子どもは恥ずかしがらないし、元気! 書くことではなく、話すことから始めるのが良いと思う。マレーシアは、教育全般に比較して、英語レベルは高いと思う(多民族の影響か?)。

⑤どんなところに行ったか: 日本では、奈良、京都、広島(日本の家族の家)、香川(勤め先)特に神社仏閣に興味を持った。奈良の大仏、清水寺、伏見稲荷大社な

ど。食べ物は、さぬきうどんが好き。マレーシアでは、クアラルンプール、ペナン、ジョホール、サバ、サラワクなど、現在体験中。

⑥今も世界各地で続いている戦争について: 広島原爆ドーム、資料館を見学して、とても悲しかった。歴代市長の核兵器ストップの書簡を展示してある一室があり、深く共感した。自分のルーツは、アメリカ&日本…。私の心はしばし混乱した。もちろん、今のアメリカにも問題がある。人種よりも経済格差が大きな問題。経済と教育にFixすることが大切だと思う。今後も教育に関わり、平和な社会へ向かう活動の一翼を担いたい。

こうして話しているうちにも共通項、共感があり、地球広しといえども、知り合ってみれば、意外にも世界は狭い。人みな同胞だと感じた次第である。

ちなみにJaredは1977年生、イリノイ大学卒業。専攻はアメリカ文学。職業は英語教育。趣味は、詩作、短編小説、家族史、他、音楽活動(作詞作曲、演奏)

このことをきっかけに彼は毎週Muhhibahセンターに来てくれている。最後にJared作詞のムヒバ・ソングを紹介する。2頁の本人の寄稿も合わせてお読み下さい。

♪♪~

We call it fun, but you may call it gladness. Stay here with us and you'll forget your sadness. Happy students are we, having fun neath the trees, and when we are gone you'll remember our song. We are Muhhibah, Muhhibah, Muhhibah, Muhhibah! ♪♪~



Muhhibahソングをみんなで歌う様子

## ACSだより Khor Ai-Na

### ☆☆☆ ハリラヤケーキづくり ☆☆☆



左：ケーキづくりに勤む様子 右：新鮮なパイナップルと販売用に箱詰めされたクッキー

ACSは、先月、マレー系の人たちのお祭り（ハリラヤブアサ）に使用するハリラヤクッキーの大量注文で、ほんとうに忙しい日々を過ごしました。主にパイナップルロールとピーナッツバタークッキーをつくったのですが、売り上げは、RM 4000.00（130,000円）もあ

りました。私たちは、まず、新鮮なパイナップルの果実から、ジャムをつくり、ピーナッツは揚げて、さらに砕き、それらをなめらかにするという難しい作業のあと、クッキーをつくるのです。とてもハードな仕事でしたが、ステッピングスト

ーンのメンバーは、疲れを見せることはありませんでした。実際に彼らは、新しいバージョンのケーキやクッキーづくりに挑戦し、その出来上がりに興奮していました。彼らは、注文をこなすために、土日も休むことなく、一生懸命働きました。ステッピングストーン

のメンバーたちは障害を持っていても、一般の労働者と同じように責任をもち、厳しい労働をこなしました。この経験は、彼らが普通の労働者となんら変わることなく社会で通用する人であることを証明してくれました。ほんとうに彼らに感謝しています。

## RCSはいま 中澤 健

### ☆☆☆ 新メンバー紹介と道路工事 ☆☆☆

8月から、また、新しい女の子が加わりました。正式な名前は、Levinia Lipia、呼び名は、ピアちゃん、8歳です。ヴァンで迎えに行けない遠くから通うので、村で車を持っている知り合いに契約で送迎を頼んでいます。1ヶ月でRM60.00（¥2,700）の契約です。貧しいので厳しいですが、同じ地域のネリーと一緒に通ってきます。軽いCPの片麻痺があり、今は歩けません。歩くことに意欲的で近くPTに見て貰う予定です。



笑顔のピアちゃん

話が出来て表情も豊かで、笑顔がとても可愛いです。みんなに大事にされていますが、特にこの前入ったナナが親切です。

次の話題は道路修繕です。1年半前、12月末の大雨の夜、「ムヒバ」の道路は無惨にも20%以上にわたって崩れました。修繕には途方もない費用がかかることが分かり、自分たちで応急補修をしました。去年の1月でした。「ムヒバ」スタッフとメンバーに村人も加わってくれました。当分は大丈夫とはいうものの絶えず不安はありました。

ところが今回、サラワク州土木局が腰を上げてくれました。大工事です。7月始めに始まり、重機が何種類も入り、8月半ばの現在も進行中、完成が楽しみです。



工事進行中の道路

もうひとつ。間もなくワークキャンプです。今回は11名の参加者ですが内9名がリピーターです。最高は6回目の参加で、今回は「ムヒバ」の建物内外のベンキの塗り直しです。8月31日から9月6日、男性5名、女性6名です。

## じやらんじやらん ちやり がやん♪(34回)

### 花のようで花じゃないブーゲンビリア 上杉 誠



ブーゲンビリアの花は？

南国ボルネオに来ると色とりどりの花が町の各所に植えられています。赤、ピンク、オレンジ、黄色、紫に青と大小様々種類も豊富で「ああ、南の島の楽園だなあ」なんて気分させてくれるものです。そんな花々の中には、一見花のように見えて花ではないものがあるいくつかあります。その中の一つが南国を代表する花「ブーゲンビリア」です。

ブーゲンビリアは元々中南米原産。その美しい姿と育てやすさで園芸品種として世界中の暖かい南国へと広まっていきました。ボルネオでも町の中の街路樹や各家庭の庭を彩る植え込み、蔓状に育つ性質を利用して入り口のアーチにされていたりもします。

本来、植物にとって「花」と言う器官は、子孫を残すための花粉を作り、受粉をするための生殖器官として発達させます。その花粉を運ぶ方法は様々ですが、昆虫や鳥、コウモリなどを花粉の媒介者として花に集め、別の花へと運ん

でもらう方法をとるものが多くあります。そのため、花は大きく派手な目立つ姿となり、綺麗なその姿に人間も惹きつけられてしまうのです。

ところが、「花」と言う生殖器官は、多くの遺伝子を残すためにたくさんの花粉も製造する役割を持っていますので、目立つ様に花自体を大きくし、媒介者を呼び寄せるために蜜を作ったり香りを出したりもしなければなりません。色素も使い派手に見せなくてはならないなど、一つの器官に多数の機能を持たせていくと、莫大なコストがかかってしまうことになります。そこで、花自体は生殖器官としての役割に集中させ、他の器官に生き物を惹きつける役割を持たせる植物が出てきました。日本でもオシロイバナやミズバショウなどが挙げられますが、ブーゲンビリアもその一つなのです。

ブーゲンビリアは赤紫を中心にピンクやオレンジなど様々な色があります。この派手な花に見え

ている部分が実は花を包む「苞」と呼ばれる部分。本来は芽やつぼみを保護するために包む様に発達するもので、器官としては「葉っぱ」の部分になります。ブーゲンビリアでは、三角の形をした派手な色の花弁のような部分が「苞」にあたり、それに包まれた中心にある白い歯車状のものが実は「花」の本体なのです。

そんな見目にも美しいブーゲンビリア、意外と丈夫で育てやすい観葉植物でもあります。ボルネオの思い出に育ててみるのも良いかもしれませんね。

jalan jalan cari kawan はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

## ACEに入会のお誘い

### \*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナンのMCSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

### \*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

### \*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

## 編 集 後 記

- ・戦後70年記念日周辺で今号の編集に関わっております。この一週間ほど、マレーシアで唯一見られる日本の放送NHKワールドプレミアムでは、毎日のように戦中の厳しさや 現実を語るドキュメンタリーが放映されています。誰も戦争を好きな人はいない。二度と戦いのない平和な世界にしなければ！折しも、今号では、偶然出会った日系4世アメリカ人の家族史から、国と国が戦う悲劇を身近に知りました。みんなで、心をつなげて「平和」という目標に向かいましょう。(Kazuyo)
- ・3頁を飾ってくれたソフィアこと古藤さん「ムヒバ」の噂を聞いて、クチンからバスやボートで自力で来た。ジェニーのロングハウスに泊まって、毎日「ムヒバ」の仲間と接した。好奇心旺盛、行動力があって、感受性も豊かな女性。今頃は日本の大学生に戻って、周囲の人たちにマレーシアを語っていることでしょう。残りの大学生生活、頑張ってくださいね。(Ken)